
異常な僕と普通な君。

色彩の

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異常な僕と普通な君。

【Nコード】

N7269L

【作者名】

色彩の

【あらすじ】

主人公 クルトは異常だった。それでも彼は普通を目指す
だがそれを許さない展開が次々と来てしまい
何かとあきらめの早い主人公をお楽しみください。

？・悪夢な日（前書き）

少しの手直しをしました
大まかな内容は変わっていません

？・悪夢な日

「はっ！」

小さな掛け声とともに銀色にほのかに発光する片手剣に首を斬られ倒れる赤い骸骨兵士 レッドスケルトン

「クルト君、やーっと倒した？」

と、溜め息混じりに聞こえる綺麗な声

艶のある黒のセミロング

整った綺麗な顔立ちで大きな青色の瞳

すらりとした体を白と青をベースにした戦闘服

彼女はイリス。ミリア学園内では高レベルな魔法使い

軽く深呼吸しながら

「ダメージは痛いから喰らいたくないんだよ…」

多少のダメージは回復魔法ヒーリングで治る。だが切断など大きなものは治らない

治るとは言え痛いものは痛い。

「だからって皆待ってるのにのんびり倒してるのはどうかと思うよ？」

もつともだ。

今回は6人のパーティーで来ている

早く倒すのに越したことはない

「う…な、ならイリスの終わったら援護してよ…」

「私に甘えない、男の子でしょ。一人でしっかり倒す！」

と、指差しながらビシッと言われてしまった

「それズル…うん。わかったよ…」

とは言えココのダンジョンの難易度は中の下。

しかし中盤以降、防御力の高いモンスターが多い
対して魔法防御は低い

何よりも出てくるモンスターは 骨。ホネ。ほね。

てか骸骨しか出て来ない

ゆえに通称ホネダンジョン。

火力低いのでどうしたものか思案していると

真横から声がかかった

「普段ソロらしいねー多人数は慣れない？」

と、今回のパーティーリーダーの男

「慣れる以前に中盤なってしまいましたからね…硬くて大変です」
俯き気味に言う

「ま。こっちが終わったら援護入れるから頑張りな〜」

と、肩を叩き

軽く手を振りながら先頭に戻って行った

…真面目にやるか

これまでは盾と剣でガードしながら倒していたのを
途中に攻撃の速い魔法を織り交ぜて攻撃した。

それでも付いていくのがやっと

代わりに無傷。

リーダーが立ち止まり

「さて。やっと終盤の分岐まで来たな」

この世界のダンジョンは中盤、終盤に入る時に分かれ道 分岐点がある

今回は左右の2択

「弱いのは左側だったな？」

リーダーの付き人が意見する

「ああ。しかしそろそろ入れ替えだから戻った方が良くないか？」

分岐点は進む道で敵の強さが変わる

その強さが一定期間でランダムに入れ替わる

しかしその期間はピッタリではなく前後にずれる時がある

「いや。入れ替えの期間はもう少し先のはずだ。

左があつていれば次に出てくるモンスターはブルースケルトンのはず
違った場合は撃退しつつ後退する

行こう。」

これまでは各個撃破だったのだが隊列を組むことになった

前衛が壁役リーダー含む3人

後衛が魔法攻撃兼回復役がイリス含む2人。

俺は後衛で壁を無視した敵を叩く、いなければ魔法攻撃役になる遊
撃手になった

これを決めている時も嫌な予感があつた

しかし気のせいにして無視した

それがこんな結果になるとは思っても見なかった

隊列を組んだのは正解で

思いのほかサクサクと進んでいた

「隊長。なんか楽勝ッスね」

と右側の大盾の男

「気を抜くな。俺達がやられたら後ろの3人を誰が守るんだ」

うわリーダーカッコイイ事言ってるし

すぐあんな言葉でようになりたいな

嫌な風が吹いた気がした

！

そういえば道幅がさっきよりも広がっている気が…

「すみません」

と。男はすぐに盾を構え直す

「来るぞ！！！」

とっさに叫んでいた

叫ぶと同時に襲い掛かってくる紅い眼光のブラックスケルトン
こんな時に入れ替えかよ！

「撤退だ！後退！！」

リーダーが叫ぶ

後ろにもいつの間にかいる

あっという間に囲まれてしまった

それでも

「ファイアーボール！」

「ホーリーアロー！」

「ウィンドブラスト！」

手当たり次第に魔法を次々に放っていく

しかしブラックスケルトンは物理防御よりも魔法防御の方が高い

なかなか数が減らずに
少しずつ輪が小さくなっていく

「血路を切り開くんだ!!」
再び叫ぶリーダー

二刀流に持ち替え
静かに

「行きます」
一言。

リミッター
制限解除

他人と比べ魔力量が異常なまでに多いので頼んで作ってもらった物だ。

魔力をこめて念じれば解除され自分の使える魔力量、出力が元にもどる

魔力が跳ね上がる

「風の衣」

薄く、強靱な風の鎧をまとう

続けて

「風刃」

剣に風の刃をまわせ

全身に魔力をみなぎらせ

後ろにいるブラックスケルトン達に突っ込む

振り抜く剣は弱点の頭部を切り刻み

振り下ろされる斧は風に遮られる

あっという間に退路が出来る

「逃げろ！」

叫びながら斬撃を飛ばし数を減らす

しかし

やはり数が多かった…

わずかな間に

大盾の2人、僧侶の1人が倒れていた

イリスもリーダーの影に隠れながら逃げる

「これ以上は通さない」

その一心で斬りつづけた

50匹近くは倒しただろうか
気が付くといなくなっていた

一息入れる時間も惜しんで

急いでイリス達を追いかける

いた！

しかし周りにはブルースケルトンが4匹いる

2人は正面の3匹に気をとられて後ろから忍び寄る1匹に気づいていない

リーダーは盾が壊れているようだった

イリスにこん棒での後ろから一撃。

「キャッ……」

小さい悲鳴と共に倒れる

リーダーも盾無しで3匹は無理のようで畳み掛けられてしまった

叫び声と同時にブルースケルトンが切り裂かれる

また……か

4人もやられてしまった

後悔しながらイリスに回復魔法のヒーリングをかける

そして抱き抱え敵を無視して出口へ疾走した

ネージユの城壁をくぐり、城下街を通り抜け

そこにある4つのうちの1つ

俺達が在籍しているミリア学園の保健室に向かった

保健室には時期にもよるが大抵1〜2人の先生がいる

清潔感のある白い部屋に病院と見間違える程の広さとベッドの数。

先生によると
傷も治っているし走査魔法^{スキャン}かけても特に異常は診られなかった。
と言う

続けて

もしかしたら殴られた時のショックでその時の前後の記憶が飛んでいるかもしれないとも言われた

イリスを寝させて置き
起きたら連絡をくれるように頼んで

保健室を出た

行き先は1階の大広間
そこにある依頼受け付け所

「はぁ…気が進まないなぁ…」
と、ぼやきつつも

依頼の報告に向かった

依頼内容はブルースケルトン30匹の退治

さりげなく依頼こなしているので失敗ではないが
「4人…もなぁ…」
やられてしまったのを報告するのだから気が引ける

それでも勝手に足は受け付けに進む

受け付けの人に

4人やられてしまったこと

入れ替えがあつたこと

を話した

労いの言葉と報酬金を貰い

適当な食事を摂り

部屋に戻るか考えていると保健室から連絡がきた

すぐに保健室に戻り

部屋のカーテンをくぐる

「イリス。大丈夫?」

「大丈夫!そんなことよりお腹減った…」

お腹に手を当ててアピールしてくる

「元気みたいだね、よかった。んじゃ何か食べ行こうか」

「うん!」

元気な声を聞いて安心しながら先生にお礼を言つて食堂に向かう

あ。でも俺さつき適当に食べたんだ…

食堂で席を取り食事を持つてくる

夕飯時なので人が多く賑わっている

イリスはシチューを

俺はこれ以上食べる気になれずにサラダを頼んだ

「サラダ…って、それで足りるの？」

アハハと、苦笑いしながら

「イリスが目を醒ますの待ってる間に食べたんだ」

「そっか、じゃあ野菜少ないから少しちょうだいね！」

微笑みながら

「ああ、食べる時よそるよ」

「ありがとう！」

と、笑顔で言われた

それから外を歩きながら

依頼の配当金を渡し

4人がどうなったのか

を、話した

リミッターをかけていることには触れなかった

4人もやられてしまったことがショックで沈んでるイリスに

「多少ショックでも授業は出なよ…」

「4人も死んじやったんだよ！？もう二度と会えないんだよ！？」
半泣きになって言うてくる

当たり前だ。でも言葉に詰まる

何を言えばいいのかわからなくなってしまった

だが勝手に体が動いていた

ゆっくりと抱き寄せ小さな声で囁く

「それでも俺達は生き残った。生き残ったなら…生きようと思うなら、あいつらの分まで俺達が生きるんだ。」

昔のことが一瞬頭を過ぎり心が折れそうになるのを必死で堪える
折れてしまえば 泣いてしまえば楽になったかもしれない

だが

俺は堪えることしか知らなかった。

「うん。そうだね明日、授業でるよ
だから

一緒に強くなろう」

恥ずかしさが来て腕をほどきつつ

「俺、本気でしたら強いよ？」
と本当なのに冗談っぽく言う

俺は嫌になるくらい強い。

ここにいるのが疑えるくらいに
魔力量、その出力、使える魔法の量、レベルもあるのだがどれを取
っても相当違うはずだ。

だからこそそのリミッターなのだが・・・

「うん、待ってる。」

ランキングは俺よりイリスの方が高いから“待ってる”と言ったの
だろうか？

てか即答された…？

少し固まってる

「じゃ、また明日ね！おやすみ！」

「あ。うん、おやすみ。また明日ー」

最悪の一日がいつものように終わった。

？・悪夢な日（後書き）

初投稿ですがよろしく願いします

？ ・ 買い物と（前書き）

すこし手直しをしました

大まかな流れは変わっていません

？・買い物と

あれから数日後。

イリスは時々沈んだりしていたが、今では落ち着いたようだった

今日は授業がない

すなわち休日だ。

いつものようにダラダラと

うたた寝をして朝ごはんも食べずに昼まで寝ていた

ハズだった

メールが来た。

『となりのフェルミまで行くから乗っけて欲しい』
と言う内容

加えて

『両親は仕事で忙しいからお願いします』

：

結局断るに断れなく

メールの送り主のレミナを迎えに親の魔動車を借りる

魔動車は魔力が動力の車だ。

能力試験と筆記試験、実技試験に合格すれば乗ることができる
でも大体が最初の能力試験で落ちる。魔力量が少ないと運転すること
ができないからだ。

20歳くらいまでにかけて総魔力量が増えるので20歳くらいがメ

アスになっている

運転技術はほとんど必要なく

行き先を告げればそこに自動で向かってくれる

もちろん手動に変えることもできる。外を走るときは基本的に手動になる

家の前で一人待っていた

「レミナ、待った？」

とは言えまだ昼前で眠い。

レミナは太股まであるゆるいウエーブのかかった栗色の髪、細身に
加えてスタイルがいい

車に乗りつつ

「んーん。今出てきたところ」

「ならよかった。んじゃ行こうか」

レミナを乗せ城壁へ向かう

そこで行き先を告げて外出許可証をもらう

「フェルミにしゅっぱーつ！」

「おー」

フェルミに向かっていている最中何度かモンスターに襲われた
もちろんこっちのほうが速いので適当に迎撃して逃げた

が

外にたくさんモンスターがいるとは言え
城と城を結ぶ道にそんなにモンスターが居ることは少ないのだ
偶然、道を通ろうとしているのに出くわしたのが重なっただけなら
いいのだが：

「お。見えたね」

フェルミの城壁が目に入る

森を切り開いてできているフェルミ。

城壁は高くそびえ、所々に見張り台がおいてあり
中央にそびえる塔は城のものだろう

城とか城壁はネージュと似ている気がする

フェルミに到着し、さきほど言っていた買い物をする
授業に必要なものや趣味、洋服なども買っていく
だいたい女の子の買い物は長い。

「これどうかな？これとかどう？」
いろいろと服を手に取り選んでいる

「どれも似合うからいいんじゃないー？」
若干投げやりになってしまった気がするが
実際似合っているのでどういえばいいのかわからなかった

洋服選びも一段落し昼食も食べ終えて

「さて…やることやったし次はどこに行きたい？」

「んじゃー買い物したいな」

「マタデスカ！？さっきやったじゃん？」

「まだ見てないところがあるのー」

「わかったよ…」

どこへでもお供しましょうお嬢様（棒

「棒読みじゃなかったら満点だったのに…」

などとしやべっていると

ウウウウウウウ！

警報が鳴った。

ああ…最近嫌な予感がよく当たる…

モンスターの襲撃が来たのだろう

戦える者を徴収するための警報だ

だがネージュはここ最近…と言っても7年前くらいに襲撃が来たくらいである

周期とかが決まっているわけじゃないので突然来る

「えっ何ナニ!？」

突然の警報でビックリしたレミナに説明する

「モンスターの襲撃だよ。人手足りないかもだし俺は行くけど…レミナはどうする？」

と城壁に向かって歩き出す

「え、ちょ…ちょっと待って！」
服を掴まれ止まり

そばまで寄ってきて身長差の関係で上目遣いに聞いてくる

「戦うの？」

「戦うよ。だぶん賞金も出るだろうし」

ネージユの時は倒した数により賞金がもらえたそうだが
フェルミも同じかはわからないが…

「でも危ないよ？」

「俺、強いから。前に出る気は無いし大丈夫だろ」

それでもやはり不安みたいだ

「まー俺の後ろいてくれれば大丈夫だよ。」
頭をなでながら城壁に向かう

レミナは

「うー」

と唸っていたが付いてきてくれた

城壁付近にはたくさんの人がいた
仕切っている人がどんどんPTを作り城壁の外へ送り出していく

「すみません」

と待っているのは嫌なのでさっさと話しかける

あからさまに

なんだこのガキは

的な顔をされたが撃退の参加を言うとオーケーしてくれた

外ではまだモンスターが来ていなかった

城壁の上と、城壁の外で抜け目なく迎え撃つようだ

そろそろと周りに人がいる

大体は前に盾を持った人、後ろに杖や弓などを持った人がいた

その中に紛れ込む俺たち2人のPTは後衛で魔法を打ち続けるだけの楽な仕事

今回襲ってきたモンスターはゴブリンという種族。

そこそこ繁栄しているが人間とは敵対している

強さは比較的弱い方だが群れで行動するので数が多い

油断していると「囲まれていた。」なんてことはよくある

腕の裾が引つ張られた

「ねね、来たよ」

レミナがささやき声で教えてくれる

遠くを見ると

剣や斧で近接攻撃してくるゴブリンソルジャー

弓をもったゴブリンアーチャー

イノシシのようなモンスター　ボアに乗っているゴブリンもいる

とにかく数が多い。どこにこんなに数が居たのだろうか…

あまりの多さにレミナが背中に隠れてしまった

安心させるために頭をなでながら

「とりあえず前に魔法打ちまくってれば勝てるから大丈夫だよ」と、言った。

…楽すぎる

それもそのはず明らかに後衛が前衛の人数の倍以上いるのだそんな人数に向かつて走ってくる敵を魔法で撃ち落とすだけ下手な鉄砲も数撃てば当たる。それが実感できる状態だった

飛んでくる弓矢もこちらの攻撃魔法の弾幕にかき消されている時々落ちてくるがすぐにヒールして元通り。

「なんで襲撃しに来たのやら…」

あからさまにもものすごい勢いで倒されていくゴブリン。

となりのレミナはがんばって魔法を打ち続けている

戦力をここに集めてほかに攻撃？

でもこのこと同じ用に城壁をぐるっと一周囲ってるのになあ…

どっかの小説に自殺部隊とかあったけどそれかな…

状況をしっかり見ておこうと探索魔法^{サーチ}を使ってみる

自分の周りを大まかに調べる魔法で

出力と使用魔力量によっては細かく調べることもできる

うーん

攻撃されてるのは他に2か所くらいか、フェルミは大して動いてないみたい

ん？

奥にゴブリンではない何かが居るな

出力を上げてみる

サキュバスっぽいかな

サキュバスは魅惑魔法^{チャーム}が使えて他のモンスターなどを操れる人間もかかるので防ぐには強い精神力と目を見ないこと。

正直ほとんど覚えてないや

チャームってこんなにたくさんのモンスターを操れるんだなーと感心していると

ほんとにサキュバスが来た。

ここの部隊長が気がつく

「サキュバスだと！？精神を強く保て！決して目を合わせるな！」
全員に向かって檄を飛ばす

「あーら釣れない男たち」

などと言いながら降りかかってくる弾幕を防御魔法で防いでこちらに来る

今なら高速移動で至近距離から最大火力の魔法放って終わりな気がする。

そんな考えが過ぎる

だがそんなことをこの弾幕の中、普通はできないと思ったので破棄する

でも破棄したら他の人がチャームにかかってしまいかもしれない

一瞬迷い考えこむ

その迷いが間違いだったと気がつくのはすぐだった

サキュバスから一番近い2、3人の前衛がいきなり振り向き切りかかる

「うわっ!？」

周りの人がすぐに止める

「クルト君どうしよう?」

「大人にまか…」

任せる。とは続かなかった

目の前の人がレミナに切りかかってきた
とっさにかばう

肩から腹にかけて斜めに切られた

「痛っ・・・!」

すぐに魔力弾でその人のあごに当てて倒れてもらう

「クルト君！」

レミナの泣きそうな声が聞こえる

「大丈夫。」

みんなを守れるだけの力があるのに怖くて使えないとか…
笑えるな。

みんなとは言わない。レミナだけでも守ろう
今の俺にできる全力で。

やることは決めた

まずは止血程度に傷を塞ぐ
あまりここで魔力を使っではいけない

取り押さえているのを見て不敵に笑うサキュバスを見
一気に行く

「サンダーブレイク！」

何もない空間から雷が一閃

今使えて単体攻撃が一番強い魔法を放った

「…っ!？」

シールドをも突き破って落ちてきた雷に感電する
一瞬固まる

それで終わりだとは思わない
さらに

「ウインドブラスト！」

複数の風の刃を連続して当てる魔法
一番の得意魔法で攻撃範囲を使用魔力によって変えることができ
出力も上げればかなりの攻撃力も期待できる

これでもかなり魔力を込めたのだが・・・倒せないみたいだ
「っこの餓鬼：！」

さっきの笑みを完全に消してこっちをにらみつける

風の刃が残っているうちに

武器を長剣に変え両手で持ち

前衛を目にも止まらぬ速さで抜けてサキュバスに突っ込む

サキュバスも反応し魔力で長い爪を作り迎え撃ってくる

スピードを落とさずに横なぎに剣をふるう

「っせい！」

ガキイイイン！

シールドと爪に阻まれる

「くっ…！」

口々に魔力も残っていないから
たくさん魔力を使う高機動状態は長くは持たない
だから短期決戦しか選択肢にはない

速さにモノを言わせて雄たけびを上げて切りまくる

「うおおおお！」

ガガガガガガガ

周りからは速過ぎて姿はもう見えてない

かすかな残像と剣と爪の衝突音、その光しか見えない

猛攻虚しく半分ほど防がれてしまう

シールドを割るくらいの火力に回せる魔力が足りなかったからだ

「くっそ…」

そろそろ魔力が底を突く。

無くなる前に離脱しないと…

瞬時に1歩下がり距離を置き

すぐに踏み込み一気に加速しながら

「風撃！」

もうない魔力を振り絞り放つ。

風の刃を剣に載せて振るう

ガアアン！

真正面だったのであっさり防がれる

その反動も使って部隊の後衛の位置までもどり

着地。そのまま倒れこむ

「クルト君！」
レミナが叫ぶ

レミナの近くに付いたみたいだ
すぐに寄って来て起こしてくれる

俺と入れ替わりに

「行くぞ」

フェルミの王城近衛兵数名が到着しサキュバスを攻撃する

“王城”と名がつくだけあって
完璧なチームワークと圧倒的な火力ですぐに倒された

チャームをかけていたサキュバスが倒されたことで
チャームが解けゴブリンが撤退していく
と。言ってももうほとんど数は残っていないが…

「大丈夫かい？」
部隊長がゆっくりと言う

「あはは…なんとか」
作り笑いもできないくらい疲れた

よくみると王城近衛兵の恰好をしていた
疲れていて気がつかなかった

「王城近衛兵だったんですね…」
「まあね…みんなに叫んでいたら出番を取られてしまったよ」
そうはいつでも俺が戦っていた時間は1分弱程度だ

「まあ。君が突撃してくれたおかげで指示も出せたり
すぐに倒せてよかったよ、立てるかい？」
と手を伸ばしてくる

その手をとれなかった

「全身の力が抜けてなにもできないんです」

ふむ…と少し考え

「ちよいと失礼」

しゃがんで俺の手をとる

「痛いかもしれないがうまくやってくれ」

「はい」

部隊長の魔力が俺に入ってくる

魔力を俺に渡してくれているのだ

だけど他人のものは自分のとは違う

入るときに変換をする

変換がうまくいかないと拒絶反応で痛みが走る

すこしの間魔力をもらう

「こんなものだろう」

と手を離す

「ありがとうございます」

「痛くなかったのかい？」

「まあ…耐えられる程度でした」

そうか。と言って
たくさんの方のほうに向き直り高らかに勝利を宣言して人々を町に
帰す

さて…とつぶやき

「君たちには先に報酬を渡してしまおう」

「いいんですか？」

いいんだよ。といい2人分の報酬をもらう

「ありがとうございます」

「いやいや。フェルミで困ったことがあったら来るといいよ」
と言われ連絡先をもらった

「ネージユの生徒なんですが…」

「あーやっぱりそうなのか。ま、いいだろ」

お礼を言っただけ

ちょっと気まずい空気になった

無理やり壊すか…

あ。言わないと思うけど釘さしておこう

「レミナ。」

「ん？」

「俺が強いことは内緒な」

「なんで？」

「なんでも。秘密なんだよ」

「わかった」

「ありがとう」

こちらに振り向き笑顔で答えてくれた

つられて笑い

「さて。少し日が暮れてきたし帰ろうか？」
「うん」

フェルミでの波乱の一日が終わった。

？ ・孤独な。 前編（前書き）

6月26日読み返したら間違っているとところを発見したので訂正・・・
内容はほとんど変わっていません。
27日タイトルも修正・・・

？・孤独な。 前編

フェルミでの一騒動に巻き込まれてから数日後

おはよー、おはよう

と教室では挨拶や雑談が飛び交っている

「おはよ」

気が付けばイリスがいた

「おはよう」

目をこすりながら返事を返す

「相変わらず眠そうだねー」

「いつだって寝不足だしな」

「しっかり寝なさい。」

「はいはい」

「もう、まーいいわ。今日さ依頼日だね。よかったら一緒に行かない？」

学園の授業の代わりに依頼をこなす。という日がある

依頼は町民や学園、自治体から来るのが大体のもの

数は少ないが城からも来る

内容はそれぞれで、犬の散歩のようなものから討伐系の依頼もある

「…今日って依頼日だったっけ？」

「そうだよー。で、どうする？」

「ちょい待って」

メールを確認する

新着1通 差出人不明。

「あー悪い。今日はソロでやるよ」

「そう…実はまだ引きずってる?」

心配そうに覗き込んでくる

「引きずってない。って言ったら嘘になるけど

ほとんど吹っ切れてるつもりだよ」

「わかった。ソロはいいけど無茶とか危険ことはしないでね」

「ああ。約束するよ」

今日は俺はすべての誘いを断って

差出人不明 城から直で来た依頼をこなす事にした

城からは通常の依頼とは一つ二つレベルが違う

生半可な人だと即死レベルな…

だからこそ依頼を受けれる人が限られている。その一人に俺が入っている

依頼内容は

1、かなり大きくなってしまった山賊を全滅させてほしい

2、奪われた物の回収と輸送時の護衛

と、言うものだった

規模は相当でかく、山。丸々1個を根城にしている

中堅〜高レベルの8人構成の討伐隊があっさり撃退されたからこっちにまわってきたらしい。

回収の方はかなり後方に城兵がそこその人数が待機しているので
そっちに任せる

山のふもとまで来て

ま。サクッと終わらせて帰ろつと

イリスたちに遅い！って怪しまれてはかなわないし

首飾りのリミッターを外すー

スイッチを押すだけなんだけども…

「おっと危な」

先に見つかりにくくなるステルス隠密魔法をかけておく

魔力を感知されにくくする魔法

あくまで“感知”なので、見えるし音も聞こえる

リミッターを外しサーチを使って敵の場所を確認する

1 2 3…50以上いたりしないか…コレ…

山は簡単な砦になっていて、奥に城のような建物があり

さらにそこに地下があるようだ
地上に32人 地下に26人

予想よりも人数が多いな
だからこそ呼ばれたんだけどさ…

無線で待機中の隊長に連絡する

「見張りからサクッと片付けていきますのでゆっくりきてください」
了解。という短い返答

「さあて…行きますか。」

灰色の戦闘服の上から漆黒のロングコートを着る

コートから仮面を取り出す

真っ黒で目の所だけ開いている

仮面を付けて翔ける

武器の基礎状態 カラム

長方形の手に入る程度の大きさの金属

コレが声や魔力によって形を変える

を両手に持ち

まずは見張りを片付けよう
4つの角に4人

大体同じ高さの高台：じゃなく木にのり

スナイプ
「狙撃」

2つのカラムが形を変え1つのスナイパーライフルに変わる

サイレンサー
消音機付けて

4発連射し4人を撃ちぬく

高いところにいたので倒れたのに気がついていないようだ
気が付かれないのは好都合なのでそのまま地上の28人を全員ロツ
クし

魔力を限界まで注ぎ特殊弾を造る

「たーまやー」

砦の真上に向かって撃つ

弾は真上に到達すると炸裂し
28発に分かれ28人を襲う

距離が距離なのでさすがに断末魔は聞こえなかったが
反応は28人から3人に減った

少しの間があり

1人は地下へ、2人は外に出てきて迎え撃つ見たいだ

2人は固まって外に出てくる
遮蔽物がなかったので魔力弾を散弾のようにして圧力をどんどんか
けていき

ばいばい

口の中で言い、引き金を引く
弾丸は真つすぐに最速で打ち出された

1人が気づく
土を盛り上げて魔力で覆い盾が完成する
と同時に散弾が命中する

鉄と鉄がぶつかるような金属音があたりに響く

銃^{これ}じゃダメか…

スクツと立ち上がり2人に向かって跳ぶ。

「^{アサルト}
突撃」

ライフルが形を変え
簞手と2本の長剣に変わる

約200メートルを一瞬で飛び
2人のところまで盾を挟んで着地する
と同時に右手の剣に魔力を注ぎ切れ味を上げ、長さを伸ばし一気に
振り抜き盾ごと2人を切る

…手ごたえはあった

「くっそ…やられた…！」

大盾を持った男が呻く

どうやら一人には避けられたみたいだ
先制あるのみ。

シューター
「射撃」

左手の剣を大口径のハンドガンに変える
魔力を散弾に変換し3発連射する

だが大盾でガードされた

「ほう…なかなか強いな」
男がしゃべる

ん？見たことあるな…

さっきのメールの添付ファイル 画像を見る

「…バイスか。お前が頭か？」
すると男が少々驚いた顔をする

「…？」

「いや。『黒顔』の声が意外にも若かったのだな」

バイスは横に間合いをとりながらゆつくりと移動する
釣られて俺も反対に動く

『黒顔』は俺が城の依頼を受けている時の二つ名。
みたまんまっという…

「まあいい。俺のかわいい子分を殺した報いは受けてもらおう！」
そうバイスは叫ぶと剣を抜き、盾を構え突進してくる

左手を持ち上げハンドガンを構え引き金を引く。撃ちまくる

「なっ！」

撃つても撃つても勢いが無くならない！
舌打ちをしながらも
距離を取るため右後ろに跳ぶ

すると

「はあっ！」

バイスは気合いと共に一気に加速する
空中にいて避ける方向を変えられない
盾の突進を剣でガードするが大した意味はなかった

「ぐっ」

思い切り吹き飛ばされる

空中で一回転しながら念じる

アサルト！

両手の銃剣を長剣に変え
着地と同時に消える

高速移動しながら両手で連打を浴びせ続ける

が

剣が持たなかった。何十回の全力を防がれ自壊してしまった

バイスはこの隙を見逃さず

3回ほど斬り盾で思い切り叩き飛ばす

「がつ！」

砦の壁にあたりとまり地面に落ちる

ついでに仮面も落ちる

「くっそ」

起き上がり片膝を付きバイスを睨みつける

バイスは盾を構えながらもゆっくりと近づいてくる

「お前は強い…。だが俺には勝てない。」

俺は睨みつけたまま聞きつづける

「まあ…その歳でそれだ。敬意を評して全力で殺してやるよ」
やり残した事はあの世で悔やみな。と付け加える

やり残したことが…
そういえば

「じゃあな」
バイスが剣を振るう
しかし。

その剣はたった今まで俺が踏んでいた土を斬る

「どこにつ!?」
バイスは焦りながら辺りを見渡す

後ろから声をかける
「やり残した事があるから死ぬわけには…いかなかったよ。」
バイスは反対に飛んで距離をとる

両手のスピアのカラムを合わせ大鎌に変える
そして静かに言う

「死に逝く人には全力を。」

首飾りを手に取り

握り締めリミッターを壊す。

魔力が解放される

傷も瞬時に治る

ああ…懐かしい…この感覚…おかえり…俺。

バイスは尻餅をつき驚愕と恐怖の顔で言葉を絞り出す

「この…化け物…!!!」

バイスの真後ろに移動し鎌を横薙ぐ

「風切り」

バイスの胴体が消える。

続けて地下の人も瞬殺する

隊長に連絡する

「終わりました。後はよろしくお願いします」

了解。ご苦労だった

と、そっけない返事が返ってくる

一息つきスピアの仮面とリミッターを取り出すと

緊急連絡が入った。

城の特別通信士だった

「『黒顔』、緊急の依頼です。」

？・孤独な。 前編（後書き）

依頼入って切りました。これ以上は大変なんだっ
正直なところ後半グダグダな気がします…。

展開早い？ワカッテルケドイワナイデ！

ともかく！

読んでくださってありがとうございます！

孤独な。後編

「『黒顔』、緊急の依頼です。今の依頼は成功として扱い、後は別の者に任せます。」

「りょーかい。内容は？」

「西南に80キロ。クラル地下迷宮攻略へ行った8人PTの救助です」

人数を聞いて目を丸くする

「え…。8人で行って救助要請？」

「はい。」

即答され肩を落とす

「マジかよ…」

「とにかくクラル迷宮に向かってください。重傷者2名と魔力切れが1名、ボス部屋手前の安全地帯で待機中だそうです」

「りょーかい」

重傷者がいるなら急がないとね。

エアウイング

背中から半透明の薄い羽が現れる

その羽を白い魔力が包み白く発光した綺麗なモノにかわる

「行きますか」

そして助ける為に飛んで行く

今私達がいるクラル迷宮の敵は金属質のものが多く、見た目通りですごく硬い、体力も多い。なので1体倒すのにも大変なこんな場所なのに…

「どつしよっ…」

私。イリスは今とってもピンチです

重傷者2人と魔力切れ1人

やっとボス部屋前のところまで来たのに…

今は部屋のすみっこで見つからないように隠蔽結界と防御結界を張って身を守りながら救助待ちです

「助かるよね…私達…」

そう思った矢先

不意に部屋が真昼のように明るくなる

救助が来た？…でも救助依頼を出してからまだあまり時間がたっていない

何事かと全員無言で身構え緊張が走る
きたのは銀色の炎。

その炎が数体の敵を一瞬で薙ぎ払う
そして炎の後に出てきたのは真つ黒の仮面を付け大鎌を持った1人
の男の子だった

背丈は私より頭一つ分高いかなってくらい
体を魔力で護っているのだろう全身がほのかに白く発光している
そして髪が銀色なのに少し引つ掛かった

「見た感じ大丈夫ですね。救助に来ました」

力無く喜ぶみんな

私もうれしかったのだけと思いきり喜ぶ元気が無かった
みんなが心の底から喜べなかった理由はきっと

「で。他には何人いるんですか？」

1人が仮面の子に当然の疑問を投げかける

ここクラル迷宮は2年生が受注できる依頼のほぼ最高ランク
しかも受注条件には《8人パーティーであること》が入っている
普通ソロで来れる場所ではないはずなのに…

「え、他？…いませんよ。俺1人です」

「え、大丈夫なんですか？…俺達助かるのか？」

「大丈夫です。あなた達を助ける為に来たんですから。待っていて下さい」

そう言っただけの男の子はボス部屋に向き直りゆっくりと、しっかりと足取りで入っていつてしまう

さて…サクッと…終わらないんだよねー多分

ここラルミ宮のボスは4、5人で壁を作り、残りは高火力魔法攻撃で叩く。

そう言うのが一般的だと思う
受注条件にもあったように俺も8人でしか来たことがない
だから…

「ソロで倒せるのかな…？」

だけどやるしかない
深く考える時間はあまり残ってないし

俺は緊急依頼が入ってからリミッターを壊しっぱなしでスペアをつけてない

俺のリミッターはスイッチを入れていなくても一定の魔力が制限される

…そういう仕様。

俺はリミッターで自分の魔力を抑えておかないと…悲しいコトに自分の魔力に自分の体が耐えられない
壊した瞬間から俺の残り時間は約1時間

だから 残り30分！

今回のボスを遠くから見る

デュラハン 馬に跨がっていて馬もヒトも全身つや消しの黒い鎧に包まれていてその鎧の隙間から黒いモヤがあふれ出てくる

…あれ？なんか俺の知ってるのと違う気がする…

「なあオペレーター。…繋がってる？」

『なんででしょうか？』

「なんかこのデュラハン…デカイ気がするんだけど…もしかして成長するのか？」

前に見たのはデカイ人間がでっかい馬に乗っている程度だったはずなんだ。

でも…

『成長はしないと思いますが…あつ、時々サイズが一回り大きい固体が出ると報告がありますね』

…一回り？

「嘘だ…」

『本当です』

「…頑張ります」

『幸運を。』

今俺の目の前にいるのは前回の一回り大きい程度じゃない。あきらかに2、3倍ある

高さは6、7メートルあるんじゃないかってくらい

つか広いけど結構高さもある部屋だったんだな、ココ。どうでもいいこと考えてる場合じゃないや

…とりあえず様子見から下準備かな

- エアウイング

先ほどと同じように羽が生える。しかし今度は2、3枚増量。

そして軽くかがんで小さな呼気とともに放たれた矢の如くデュハンの馬の脚まで跳び、そのまま文字通り全力で叩き斬る

耳を貫く甲高い金属音。捕捉されない様に高速で部屋中を飛び回りつつ斬った場所を見る。

斬った脚は鎧に防がれていてかろうじて鎧が割れた程度。何度も叩き続ければ破壊できるだろうがそんな時間は無い。

なら

デュラハンの周りを飛び回り

軌跡が残るように自分の魔力を空間に乘せていく

少しずつデュラハンが見えなくなっていく、その姿が完全に見えなくなった瞬間 デュラハンの周囲を等間隔に手の平くらいの小さな

魔法陣が展開する

「捕まえた。」

大量の魔法陣から内側に向かって障壁を張る

張り終わるとほぼ同時にデュラハンが大斧を狭い魔法陣の中で力任せに振るう

ゴオオオオン

くぐもった鐘を鳴らしたような音が響く

「攻撃能力付きの捕縛用結界だ。…一発じゃ壊せないよ。」

デュラハンがもう一度腕を持ち上げ、攻撃の動作に入る

「ハッ遅いね！装填は終わった！！

天は全てを浄化する聖なる歌、光は全てを滅する聖なる剣とならん！消し去れ！ヘブンレイ！」

たくさん小さな魔法陣から一斉に結界の中に、デュラハンに向かって光が降り注ぐ

一応途中を詠唱したけど無いよりいいだろ。

デュラハンは悪魔で『ヘブンレイ』は浄化性持つてるから相性はいい大量の魔法陣からの一斉射だからこの場合は『ヘブンズレイ』か？『ヘブンレイズ』か？…まあどっちでもいいか。倒せればそれでよし。

魔法陣に装填していた分の魔力が終わり小さな魔法陣の結界がとける中にはデュラハンの黒いもやが見えた気がしたが闇に同化し、わからなくなる

「終わったかな…」

結界もその中身もなくなった空間を見ながらつぶやく

思ったよりも時間が残って無かったみたいだな、そろそろヤバイ…

部屋の奥に入り口に繋がる転移魔法陣がボスを倒したことで起動し淡く青い光を発する

後は一言大きな声で言えば俺の仕事は終わりだ。

「倒した！全員帰るよ！」

あの後俺は入り口に戻ると待機していた救護班と守護隊に任せて一足先に飛んで帰っていた

ネージュに近くなり速度を落とし高度を低くする

そろそろか…

「オペレーター。救護班をまた頼みます」

「負傷者を見つけたのですか？」

「俺が限界だよ。」

着陸と同時に倒れ、意識がなくなった。

孤独な。後編（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます！

えーと…なんかめっちゃくちゃ時間かかりました。
そしてなんだかんだですこし次に引きずります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7269/>

異常な僕と普通の君。

2010年10月14日17時37分発行